



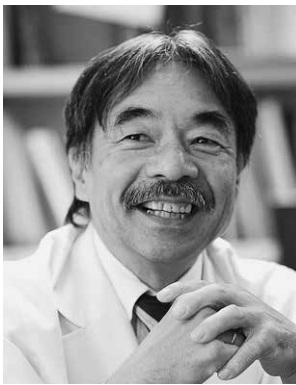
日本整形外科学会 スポーツ医学 ニュースレター

No.17 2018年1月31日発行

■ 理事長ご挨拶

松本 秀男

慶應義塾大学スポーツ医学総合センター



2017年11月の理事会で自ら立候補し、理事長として2期目を続投のご許可を頂きました。「あいつが!?!」と思われる方もおられるかも知れませんが、日本整形外科学会スポーツ医学会(JOSSM)に対する私なりの思い入れもあり、もう少し

お付き合いください。

さて、他の社会と同様にスポーツ医学でも、課題が一つ解決しては、また新たな課題が生まれます。現在の課題は、専門医制度改革に対する対応、スポーツ医学相互の連携、海外のスポーツ医学との関わり、そしてスポーツ医学の教育体制です。

まず、専門医制度改革については、専門医機構の方針決定に紆余曲折があり、基本19領域の認定がようやく始まったところです。「スポーツ医学専門医」については現状では基本19領域の専門医取得後の2階建ての部分になりそうです。我々としては、他のスポーツ医学会等とも連携して対応していく必要があるのですが、今のところ「スポーツ医学専門医」を作るかどうかも含めて、専門医機構の方針が定まっておらず、動きようがないのが現状です。但し、だからと静観していると、いざ動きがあった時に後手に回るので、常にアンテナを張っておくことにします。

日本整形外科学会(JOA)、日本臨床スポーツ医学学会(JSCSM)、JOSKASなど、他のスポーツ医学会の連携は極めて順調です。まず、JOAのスポーツ医学委

員会はJOSSMを愛してくださっている高岸先生が担当理事、帖佐先生が委員長をこれまで務めて頂いて来ましたし、今度は稲垣先生が担当理事になりましたので、とても心強い限りです。今後も是非いろいろな面で協力していきたいと思っております。JSCSMは私自身も深く関与しておりますので、これまで同様の住み分けと協力体制を維持していけると確信しております。さてJOSKASとは2020年に石橋先生がJOSSMとJOSKAS双方の学術集會会長に選出され、合同開催を行うことになりました。これまで、両方の学会で毎年同じようなシンポジウム、同じような教育講演が同じような人材で生まれ、「重複」が多々に見られましたが、これらを一つにまとめられる大きなメリットがあります。スポーツ医学を学ぼうとする若い先生方も、この合同の学術集會に来れば、必要十分な勉強ができる様になると思います。但し、JOSSMとJOSKASの組織を統一するのではなく、あくまでも学術集會を「合同」で開催することが趣旨です。「スポーツ医学」というidentityは今後も継続していきたいと考えています。2021年のJOSSM学術集會会長は稲垣先生に決定しており、JOSKASの出家会長との合同開催を計画中です。その後「スポーツ医学」がどのような方向に進むかについては、これらの「合同」学術集會を行いながら、今後スポーツ医学を支えていく若い先生方を中心に、みんなで考えていく必要があると考えています。

海外のスポーツ医学との関わりについても前任の高岸理事長や国際委員会の別府先生に道を作って頂いたおかげで、順調に発展しています。GOTSに対しては、これまでtravelling fellowを事務的に交換することが主な交流でしたが、ここ数年、会長の相互訪問や教育講演など、だんだん血の通った交流になりつつあります。

AOSSM に対しては、JOSSM から travelling fellow を派遣していますが、毎年 7 月の AOSSM 学術集会の時に AOSSM-JOSSM leadership meeting を行い、今後の協力体制について discussion しております。それにしても、この AOSSM-JOSSM の協力体制に多大なご尽力を頂いた Allen Anderson 先生が昨年急逝されたとの由、突然の悲報にただ驚く他ありません。ご冥福をお祈り申し上げたいと思います。KOSSM とは、良好な関係が定着しました。毎年交互に KOSSM-JOSSM combined meeting を開いており、昨年は 9 月の末に Seoul で開催されました。日本からも多くの発表があり、2 会場を使っての会議でした。今年は西良先生に JOSSM の学術集会の時に徳島で開いて頂きます。韓国もいろいろな新しい技術を開発したり、取り入れたりしており、日本にはない特徴もありますので、是非皆様の積極的な参加をお待ちしています。更に、JOSSM は AOSSM の official journal である OJSM や GOTS の official journal である SOT journal の「official partner」になりました。JOSSM に投稿のあった論文の内、優秀なものについては編集委員会前担当理事の柴田先生、前委員長の阿部先生を中心に、学会から援助を行って、これらの journal への投稿を補助する仕組みを作りました。是非ご活用下さい。

スポーツ医学の教育体制の問題は最初に述べた専門医との関係も有り、早急に整備すべき課題です。他のス

ポーツ医学施設を見てみたい、実際の手術を見学してみたい、しばらくの間国内留学してみたい、スポーツ医学の研究してみたい等、これからスポーツ医学を学ぶ人々も様々な希望があります。それぞれの大学や施設にすべての領域をカバーできるスポーツ専門医がいるはずもなく、スポーツ医学の幅広い領域を単一の施設で学ぶのは不可能です。幸い JOSSM にはスポーツ医学の様々な領域の指導者がいますので、これを活用すれば、それぞれの場所で広い範囲の知識や技術を学ぶことが可能です。教育研修委員会担当理事の加藤先生を中心に、一昨年、昨年とスポーツ医学の教育を受けたい人、教育ができる施設等についてのアンケート調査を行って頂きました。その結果、これが実現可能であることがわかってきました。近日中にスポーツ医学の様々な教育ができる施設が JOSSM のホームページに掲載される予定です。意欲のある若い先生方は、是非この掲示板を活用していただき、出身大学や病院の小さな枠を飛び越えて、全国の専門的な、そして最新のスポーツ医学を学ぶ機会を得ていただきたいと思えます。

2020 年を控えて、これからスポーツ医学はやるべきことがますます増えていきます。2020 年を最高のきっかけと捉え、あと 2 年間スポーツ医学会全体の体制を整えていきたいと思えます。ご協力よろしくお願い致します。

■ 第 43 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を終えて

第 43 回会長 帖佐 悦男

宮崎大学

この度、「第 43 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会」を平成 29 年 9 月 8 日（金）・9 日（土）の 2 日間にわたって宮崎市のシーガイアコンベンションセンターにおいて開催させて頂きました。2 日間の開催を通して 1229 名の医師、メディカルスタッフ、学生などの皆様に参加して頂き、無事盛会裏に終了することができました。関係各位に感謝申し上げます。

学術集会のテーマは、“スポーツ医学イノベーション継承と革新—RWC2019, Tokyo2020—”としました。イングランドでのラグビーワールドカップ、リオのオリンピック・パラリンピックでは、日本中を感動の渦に巻き込みました。これから日本で開催されるビッグイベントに関してもより一層感動できるよう、またスポーツ医学の分野からサポートできるようにこのテーマと致し、これらのサポートによって日本の子どもたちが世界に羽ばたいてくれることを祈念して、様々なセッションを組みました。JOSSM2017 のポスターも、世界に羽ばたく子どもたちをイメージしてデザインしました（写真 1）。

整形外科スポーツ医学会（JOSSM）は、スポーツ医学の中でも特に運動器（整形外科）スポーツ医学を専門としているメディカルスタッフを含めた様々な分野の方々が日本全国から一堂に会し、基礎的なことから臨床

に至るまでの最新の話題やスポーツ外傷・障害の予防・治療法などを討論する場であり、また、親睦を深める場でもあったと思っております。また、スポーツ医学の対象は、子どもから高齢者、障害者・健常者までにわたり、健康スポーツから競技スポーツ、障がい者スポーツまで幅広く、全てを網羅してディスカッションすることも本学会の特徴の一つです。競技力を向上させるために必要な基礎体力、そのもとになる健全な運動器の発育は必須です。学校における運動器検診、野球検診などのスポーツ検診をはじめ、高齢者のロコモ検診なども本学会が中心となって行い、一層推進する必要があると考えプログラムを組みました。

応募演題は、過去最多となる 352 題にのぼり、このうち 192 題を講演、160 題をポスター発表とさせて頂きました。

プログラムとして、招待講演 3 題、特別講演 1 題、教育研修講演 3 題、シンポジウム 40 題、パネルディスカッション 47 題、ランチョンセミナー 9 題、ハンズオンセミナー 2 題、特別企画 1 題、学術プロジェクト 2 題、Traveling Fellow 報告 2 題、企画レクチャー（開業医に役立つ実践セミナー）、学生と若手医師が語るスポーツ整形外科 10 題とスポーツイベントなどを実施しました。



写真 1：JOSSM2017 ポスター



写真 2：会長挨拶



写真 3：招待講演 1
Dr. Daniel C. Wascher



写真 4：招待講演 2
Dr. Churl-Hong Chun



写真 5：招待講演 3
Dr. Vicky Tolfrey



写真 6：特別講演 川原貴先生



写真 7：特別企画 旭化成柔道部

招待講演は、Dr. Daniel C. Wascher (AJSM Editor/University of New Mexico, USA) (写真 3)、Dr. Churl-Hong Chun (韓国整形外科スポーツ医学会 KOSSM 会長) (写真 4)、Dr. Vicky Tolfrey (Director: Peter Harrison Centre for Disability Sport, England) (写真 5)、特別講演は、川原貴先生 (前 国立スポーツ科学センター センター長) (写真 6)、教育研修講演は、松田秀一先生 (京都大学大学院医学研究院整形外科教授)、山崎正志先生 (筑波大学医学医療系整形外科学教授)、仁木久照先生 (聖マリアンナ医科大学整形外科教授) から、参加者にとり有意義なご講演をして頂きました。特別企画として、「オリンピックメダリストに聞くー旭化成柔道部 ケガとの闘い:過去・現在・未来ー」と題しまして、アトランタオリンピックの金メダリストで、旭化成柔道部監督の中村兼三監督、リオオリンピックで活躍しました大野将平選手、羽賀龍之介選手、永瀬貴規選手にお集まり頂き、日常生活、リオオリンピックでのエピソード、東京オリンピックに向けての課題など興味深

いお話を拝聴することができました (写真 7)。

ランチョンセミナー、シンポジウム、パネルディスカッションでは、専門分野のご高名な先生方からスポーツ医学に関する最近のトピックスについてのご講演をして頂きました。シンポジウムやパネルディスカッションに関しては、教室員が各自の専門種目を中心に企画し、また今まで取り上げられることの少なかったスポーツ種目も取り上げディスカッションできましたので、将来のメディカルサポートの発展に繋がると思います。あらためまして、ご参加頂いた方々に深謝いたします (写真 8、9)。

宮崎らしい様々なスポーツアクティビティ (サーフィン、タッチフット、キャッチボール) にも早朝より多くの方々にご参加頂き有難うございました (写真 10)。

最後に本学術集会の開催にご協力ご支援を頂きました参加者、企業、関係各位、学会の運営に携わっていただきました教室・大学スタッフ (写真 11)、事務局運営を担当されました株式会社コングレの皆様にご心より御礼申し上げます。



写真 8：講演会場



写真 9：ポスター会場



写真 10：サーフィン



写真 11：スタッフ

■ 第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会開催について

第44回会長 西良 浩一

徳島大学



このたび、2018年9月7日～9日、徳島市において第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を開催させていただきます。また、第16回日韓整形外科スポーツ医学会も同時開催させていただきます。学会のテーマを「情熱

と覚悟～100%を超える復帰」とさせていただきます。

スポーツ医学においてアスリートを治療する場合、治療成績が80%では引退です。術前の100%の状態としてフィールド復帰を行うことが、治療における大前提です。従いまして、スポーツドクターが治療を行うには「情熱」が必要です。さらに、治療成績によっては引退となるアスリートを、責任を持って治療するには「覚悟」を求められます。スポーツドクターは、常々、「情熱と覚悟」を持って診断と治療に当たっているのです。

近年の手術療法の特に低侵襲内視鏡治療の進歩に加え、コンディショニングやリハビリテーションの発展により、アスリートの治療成績が飛躍的に向上しております。現在では、受傷前の状態以上にしてフィールド復帰が可能となる時代です。従いまして、サブタイトルを「100%以上に復帰」としました。二度と再発しない状態で復帰させるという意味も持ちます。

今回のメインの企画は、「100%を超える復帰・パネルディスカッション」です。各部位毎にパネルを用意いたします。このパネルを聞くことで、復帰までには100%を超える状態に引き上げる治療法、リハビリテーション、コンディショニングの知識を会員全体で共有し、アスリートのnext decadesにおける根本的の戦略に出来ればと思っています。もう一つの特別企画は、「女子アスリートの身体は女性スペシャリストが守る(仮)」です。ジュニ

アスリート、トップアスリート、シニアアスリートの3つのセッションとします。各5名、総勢15名の女性スペシャリストにより各世代の女子アスリート特有の障害とその対策について討論していただきます。その他、多彩なシンポジウムも用意しております。さらに本年は日韓スポーツが併会の年となります。多くの方々の英語での演題登録をお願いします。二日目は、全会場で一、二日英語での討論。今からとても楽しみにしております。

文化講演にはアルピニストの野口健氏をお招きいたします。野口氏は1999年にエベレストの登頂に成功し、7大陸最高峰世界最年少登頂記録を25歳で樹立した方です。現在、徳島大学運動機能外科学教室の非常勤講師をお勤めです。8000メートルを超える高地での人間の身体の変化と適応など、大変興味深いご講演が聴けると思います。

さて、徳島県は恵まれた自然環境の下、多種多様な農林水産物が生産されております。会期中、日中の学会は勿論のこと、夜は徳島の郷土料理をお楽しみ下さい。秋の徳島。教室員、同門会一同、お待ちしております。



第44回
日本整形外科
スポーツ医学会
学術集会

会長 西良 浩一
徳島大学大学院保健科学研究科運動機能外科学(国際体育)教授

2018年9月7日(金)～9日(日)
アステいとくしま

〒771-8507 徳島市東区南原1-1-1 徳島大学
総務課 電話: 087-4220-2200 Fax: 087-4220-2206
E-mail: jssm@med.tokushima-u.ac.jp

同時開催：第16回日韓整形外科スポーツ医学会

演題募集期間 2018年2月6日(火)～3月22日(木) www.congrs.jp/jssm2018/

■ 副理事長ご挨拶

総務委員会 担当理事 帖佐 悦男

宮崎大学



はじめに平成 29 年に第 43 回日本整形外科スポーツ医学会を宮崎大学で担当させて頂き、無事終了することができました。あらためまして学会にご参加頂いた皆様へ深謝申し上げます。

さて、このたび日本整形外科スポーツ医

学会の副理事長という大任を再度拝命し、大変光栄に存じますとともに責任の重さを痛感致しております。

以前、私が理事を務めさせていただきました際、本学会が一般社団法人として新しい出発をきりました。その重要な節目に関わったことは私自身にとっても大きな経験です。また当時は財務担当の副理事長として、本学会ならびにスポーツ医学の発展に貢献すること、理事長の負担を軽減すること、高岸理事長、麻生副理事長が実施されてきました財務の健全化などを中心に会の運営に努めてまいりました。今回は総務担当として、松本理事長、西良前副理事長、筒井前副理事長が勧められました事業の推進とスポーツ専門の医学会としての役割をより鮮明にする必要があると実感しております。

さらに、学会の活性化やスポーツドクターを含めた subspeciality への対応も重要な課題と思っております。

そのために、AOSSM、KOSSM、GOTS を含めたスポーツ医学会や医師以外のメディカルスタッフとの連携の推進が必要不可欠です。スポーツ医学の発展に整形外科医やその代表的学会であります本学会が果たす役割は重要であり、メディカルスタッフ、他職種、指導者などと、より一層連携することがスポーツ医学の発展につながるかと考えております。また、トップアスリートだけではなくスポーツ愛好家や市民、障がい者スポーツに関わる方に対し運動器を中心に関与し、トータルに評価・指導できるスポーツ医の育成にも学会全体で取り組み、スポーツドクターのみならずメディカルスタッフの育成や市民への啓発活動を行っていきたいと思います。

スポーツ医学に関し外傷・障害が発生した場合、早期診断・早期治療が重要なことは至極当然ですが、予防医学により一層重点をおく時期がきていると思います。学童期から運動・スポーツや学校検診を通して、日整会の進めるロコモティブシンドロームの啓発や予防に貢献したいと考えています。また、障害予防を進めることで、外傷や障害のために運動やスポーツ活動を断念せざるをえなくなる選手やスポーツ愛好家を減らせればとも思っております。

浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承し、ますます発展できますよう誠心誠意努力する所存です。どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

財務委員会 担当理事 田中 康仁

奈良県立医科大学



この度伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の副理事長（財務担当）に就任させていただき、大変光栄に存じております。財務委員会の委員には大谷俊郎先生と橋本健史先生をお願いいたしております。多くの先生方

のご努力で会員数が増え、財政的に改善傾向にありますが、収入をさらに増やし、無駄な出費を抑えることで、より安定したものになりたいと考えております。一般社団法人になったことで、次年度からは学術集会の会計が、学会本体の会計に入ることになります。年度予算を立てる場合には、学術集会の予算も決めていただく必要がありますので、会長の先生におかれましては、早めのご対

応をお願いできれば幸甚に存じます。

私は1995年に第5回のGOTSトラベリングフェローに選出させていただき、ドイツ、スイス、オーストリアを1ヶ月かけて研修をさせていただきました。各国のスポーツ診療を研修させていただきただけでなく、各種スポーツも実際に体験し、整形外科医としての夢を語り合う一生の友を日本のみならず海外にも得ることも出来ました。これを契機として視野を世界に広げる重要さに気づくことができ、整形外科医として心のよりどころになるような貴重な経験をさせていただきました。本会は私の整形外科医としての原点の一つであり、思い入れも大変強いものがあります。我が国では2019年のラグビーワールドカップや2020年の東京オリンピックなどビッグイベントがこれから目白押しで、スポーツに対して国民の期待も高まっております。本会にとりましては更なる飛躍を遂げる大きなチャンスであります。その達成に向けて私も誠心誠意努力する所存でございます。皆様の暖かいご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 理事ご挨拶

編集委員会 担当理事 **岩崎 倫政**

北海道大学



このたび伝統ある日本整形外科学スポーツ医学会の理事に就任させていただきました。たいへん光栄に存じますとともに、その重責を痛感しております。微力ではございますが、本学会の発展のため尽力させていただき所存であり

ます。学会員の皆様、何卒よろしくお願いたします。

近年、スポーツ医学は社会的にも大きな注目を集めております。これを背景として、今後も本学会が担う役割は一層重要なものとなり、社会的影響力も増していくこと

は確実です。そのために、若い世代を中心に会員を増やし、本学会をさらに発展させていく必要があります。

今回、編集委員会を担当させていただくことになりました。学会のプレゼンスを高めるために最も重要なことのひとつが、学術活動の活発化であると思います。その活発化の中核を担うのが、日本整形外科学スポーツ医学会誌の充実であることは間違いありません。幸いに、本委員会の前担当理事 柴田陽三先生をはじめとした編集委員会の先生方の多大なご尽力により、本学会誌は質の高いものになっています。今後、若い世代を中心とした学会員の先生方に投稿を促し、質と量ともにさらに充実した学会誌を発刊してきたく存じます。学会員の皆様には、ご支援、ご協力を賜りますよう何卒よろしくお願いたします。

学術検討委員会 担当理事 **山下 敏彦**

札幌医科大学



この度、日本整形外科学スポーツ医学会の理事を拝命した札幌医科大学の山下です。2008年～2013年に次いで、2度目の理事就任となります。2016年には、第42回本学会学術集會を札幌市にて開催させていただきました。

学術集會の開催を通して、本学会がますます活性化し、レベルアップしていること、そして2020年の東京オリンピック

ク・パラリンピックに向けて、本学会の果たす役割とそこから生み出されるものに対する学会内外からの期待が大いに高まっていることを実感しました。

今回は、学術検討委員会を担当させていただくことになりました。本学会の研究助成ならびに日本スポーツ治療医学研究会（JPSMF）の研究助成の審査、優秀論文賞の選考、日本整形外科学会学術総会のシンポ・パネル案の提案などが主な業務となります。学術・研究活動は、学会にとって根幹をなす最も重要な任務であるとともに、学会のステイタスを示すものであると考えます。理事会、委員会の活動を通して本学会のさらなる発展のために力を注ぐ覚悟ですので、皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

広報委員会 担当理事 **金岡 恒治**

早稲田大学スポーツ科学学術院



この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させて頂き、大変光栄に感じております。

すでに大きな社会問題となっている少子高齢化に伴う医療費の高騰、高齢者の自立支援に対する大きな

解決力を持っているのはスポーツ医学です。整形外科学は運動器の障害の最終段階である器質的障害に

対する治療方法の開発、進歩、普及において重要な役割を果たし、多くの国民に恩恵を与えてきました。しかし超高齢化社会の現在、整形外科的治療のみでは健康寿命をこれ以上延伸することは難しくなっているのが現状ではないでしょうか?スポーツ選手の障害に対して運動器機能を改善することによって、日常生活に戻すだけでなく競技現場に戻すという、我々の培ってきたスポーツ医学的アプローチが今後ますます一般国民に対しても求められてくるものと思います。

私は広報担当の理事として、我々の得てきた知見を多くの整形外科医、運動器医療担当者、患者さまに伝えられるよう、松本理事長を支えながら、尽力して参りたいと存じます。何卒よろしくご指導ご鞭撻をお願い致します。

国際委員会 担当理事 **黒田 良祐**

神戸大学



このたび、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させて頂き、同時に国際委員会を担当させて頂き、大変光栄に感じております。私は臨床においてアスリートの膝損傷に対する治療を専門とし、研究では膝関節バイオメカニクス、

靭帯再生や再建靭帯のリモデリングなどを行っております。さらに関西に本拠地をおくプロや学生スポーツチームのチームドクターを務め、地域のスポーツ振興に貢献

するとともに、学術的には本学会に長年にわたり深く関わらせていただいております。本学会の国際委員会では昨年まで委員長を2年間務めさせて頂き、松本秀男理事長はじめアドバイザーの別府先生、担当理事の菅谷先生のご協力をいただきながら GOTS traveling fellow の受け入れや AOSSM への traveling fellow 派遣選考、派遣先との交渉などを行ってまいりました。担当理事として AOSSM や GOTS との相互関係を更に強化し、KOSSM とこれまで以上に密な交流を目指し、また AOSSM、GOTS の official journal へ本学会の優秀論文を投稿出来る仕組みなども作っていきたくと考えております。微力ながら本学会の発展に尽力致す所存でございます。学会員の皆様にはご指導ご支援を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

教育研修委員会 担当理事 加藤 公

鈴鹿回生病院



この度、松本理事長による体制のもと、引き続き教育研修委員会担当理事をさせて頂くことになりました鈴鹿回生病院の加藤公と申します。

スポーツ医学が医学会のみならず、社会的にも注目されてきている昨今、日本整形

外科スポーツ医学会はより一層重要な役割を担うことになっていくものと考えております。

教育研修委員会の役割は、医師をはじめトレーナー、理学療法士、スポーツ医科学者やそれらを目指す学生への教育・研修をいかに進めていくかということになります。具体的には、これまで行ってきた「大学生・高校

生のためのスポーツ医学セミナーの開催」を継続して行っていくことですが、もう一つの柱として、スポーツ医学教育システムの構築という事業を担っていく必要が生じて参りました。「スポーツドクターになりたい」、「スポーツ医学を勉強したい」という多くの若い整形外科医たちに、学会としてスポーツ医学に関する様々な研修の場を提供できるシステムをなんとか構築したいという松本理事長の熱い思いもあって、一昨年から当委員会で少しずつその実現に向かって進めているところでございます。研修を受ける側にも提供する側にも喜んでいただけるシステムが完成するよう、委員の皆さんとともに引き続き勤めていかなければと考えております。

微力ではございますが、今後とも教育研修委員会担当理事として、本学会の運営に関わることで本学会の発展のために努力したい所存でございます。会員の皆様のご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

社会保険委員会 担当理事 尾崎 敏文

岡山大学



このたび伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させていただくことになりました。本学会会員の皆様にこの紙面をお借りしまして、ご挨拶を申し上げます。大変名誉なことでございますとともにその重責を痛感しております。

委員会では社会保険委員会を担当しておりますのでよろしくお願い致します。

東京オリンピック・パラリンピック、ラグビーワールドカップとスポーツのビッグイベントの日本開催が近づいてきています。2015年にはスポーツ庁も新設され、国をあげて選手の医科学的サポート体制を充実させる機運も高まっ

ています。選手のスポーツ傷害を防ぐため、さらにトラブルが起きた場合には適切に治療を行いスポーツ活動に復帰させるために、また競技能力の向上など、スポーツ選手を支える医療従事者の役割が非常に大切です。現在、私の教室でもJリーグチームや実業団陸上部などのチームドクターとして、多数の医師が現場でスポーツ活動をサポートしています。また、国体選抜チームなどの帯同、中高校生のクラブ活動におけるメディカルチェックやスポーツ相談、一般市民、およびスポーツ指導者を対象とした講演活動などを行っています。このようなスポーツ活動の支援を続けながら、スポーツ傷害の予防と治療に関する研究を行い選手の競技能力向上に貢献するとともに学会の発展にも寄与したく存じます。

微力ではございますが、松本秀男理事長はじめ副理事長、理事の先生方のご指導を賜りながら、本学会の運営にかかわって参りたい所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

メンバーシップ委員会 担当理事 橋口 宏

日本医科大学千葉北総病院



この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事の末席を務めさせて頂くことになりました。御支援を頂戴致しました先生方の負託にお応えできますよう、可能な限り努力を傾注するよう心掛けて参りたいと存じます。

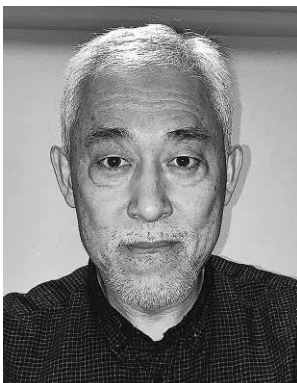
御存知の通り、スポーツ選手に対して診断から治療を行っていく上で、またコンディショニング向上やメディカルチェック・障害予防を推進させていくためにも、医師のみ

ならず、その一端を担うトレーナーや理学療法士などから成るチーム医療はとて重要となります。治療に当たっているトレーナーや理学療法士の観点から受ける助言は、選手だけでなく、われわれ医師にとっても貴重なアドバイスになることがしばしばあります。トレーナーや理学療法士のスポーツ医学に対する貢献度は非常に高く、本学会発展のためにも、その存在は不可欠なものであり、多くの方が本学会に参加されることが望まれます。メンバーシップ委員会担当として、適切な資格審査を行いながらも、スポーツ医学を志し学ぶ意欲のある方々に門戸を開き、学会員増加のために微力ではありますが尽力していく所存です。

今後とも諸先生方からの御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ガイドライン策定委員会 担当理事 熊井 司

早稲田大学スポーツ科学学術院



このたび、日本整形外科学会スポーツ医学会の二期目となる理事を拝命し、またガイドライン策定委員会を担当することになり大変光栄に存じております。さらに、引き続き国際委員会委員としての任務も再任させて頂きたくことになり責任の重大さを感じております。本学会会員の皆様はこの場をお借りしましてご挨拶申し上げたいと思います。

ガイドライン策定委員会では、数年前より帖佐悦男委員長のもと日本整形外科学会と連携して「アキレス腱断

裂診療ガイドライン」の改訂作業が進行中であります。現在、公開されているものは2007年に作成されたものでありますが、それから10年以上の年月の間に新たな多くのエビデンスが報告されてきました。アキレス腱断裂については日常診療での需要も多く、整形外科診療全般における重要性は高いものと感じています。他の診療ガイドラインについても、順次、改訂第2版が公開されつつある状況の中、この改訂ガイドラインが正確な最新のエビデンスによる診療指針として活用されるべく、委員の先生方とともに仕上げたいと考えています。浅学非才の身ではございますが、松本理事長はじめ各理事の先生方のご指導を賜りながら、本学会の伝統を継承し更なる発展に貢献できるよう努力する所存でございます。どうかご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

定款等検討委員会 担当理事 **出家 正隆**

愛知医科大学



この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事という大任を拝命しその責任の重さを痛感するとともに、本会は日本のスポーツ医学をリードする学会でそのような会の要職を拝命し光栄に存じます。委員会では定款等検討委

員会を担当しておりますのでよろしくお願い致します。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催まで3年を切り、今まで以上にスポーツへの関心、スポーツ

医学への関心が集まり、注目度も高まって来ています。整形外科医は運動器治療においてスポーツ医学の中心的役割を担ってきました。その中でも本学会の役割は、運動器スポーツ医学に関する既存および新しい検査、診断、治療などを検討する場を提供することであり、優れた研究成果を国内外へ向けて発信することだと思います。今後も中心的役割を果たすためには、充実した学術集会の開催と本学会の継続的な発展が不可欠と考えます。その実行に、本学会が魅力にあふれかつ有益な情報を提供できる学会になるように、そして更なる発展に繋がるよう微力ですが尽くしていく所存です。

何卒、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

倫理・利益相反委員会 担当理事 **安達 伸生**

広島大学



このたび松本秀男理事長のもと、伝統ある日本整形外科学会（JOSSM）の理事に就任させていただくことになりました。大変な名誉であるとともに、その責任の重さを痛感しております。大変若輩者ですが諸先生

方のご指導を受けながら努めさせていただきますので、よろしくお願い致します。

現在、スポーツ関連の学会としては、JOSSMのほかには日本臨床スポーツ医学会、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会、日本体力医学会、などがあります。同じ

「スポーツ」を対象としている以上、学会活動の内容にある程度の重複があることは仕方ありませんが、学会同士の立ち位置が依然やや不明瞭でもあります。それぞれの学会がお互いにwin-winの関係で相互に協力し、発展していくことが重要であると思います。JOSSMはその名の通り、スポーツ医学と整形外科の両者の要素を兼ね備えた学会であり、スポーツ医学における整形外科医の役割とともにJOSSMの重要性は論を俟ちません。他学会とも連携をとりつつJOSSMの発展のため学会活動、委員会活動を通じて努力する所存ですので、会員の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

理事としては奥脇透先生の後任として「倫理・利益相反委員会」を担当させていただきます。本委員会活動としては、まずは日本整形外科学会のCOIが改訂されることに基づき、本会のCOI規定の改定作業に取り組む予定です。

津田 英一

弘前大学



この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させて頂くことになりました。誠に身に余る光栄であり、その責務の重大さにあらためまして身の引き締まる思いです。

これまで私は、加藤公理事のもと教育研修委員会にて、高校生・大学生へのスポーツ医学の紹介、研修医・若手医師に対するスポーツ医学教育のシステム作りなどの事業に携わって参りました。スポーツによる障害・外傷の大部分は運動器に発生するため、その治療の主役を担う整形外科医には専門的立場から診療を進める知識・技能が必要です。更に最近では予

防やコンディショニングまで含めた、スポーツ選手のトータルケア・マネジメントが求められており、診療現場ではより幅広い知識が要求されるようになりました。「整形外科学及び運動器科学領域におけるスポーツ医学の進歩普及」を理念として掲げる本学会では、学術集会を通じたエビデンスの確立・医学情報の発信、国内・海外学会との相互交流、前述のスポーツ医学教育のシステム構築を今一層進めていく必要があります。2020年に開かれる第46回学術集会は、石橋恭之会長（弘前大）のもと日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（JOSKAS）と合同で開催されます。是非とも合同開催を成功させスポーツ医学の発展により一層寄与できるよう、担当理事として全力でサポートして参りたいと思います。

はなはだ微力ではございますが、理事の職務に専心し本学会の更なる発展に貢献できるよう努力して参ります。会員の皆様には引き続きご指導、ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

舟崎 裕記

東京慈恵会医科大学



この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に選任され、身に余る光栄とともにその重責を痛感しております。

2020年の東京オリンピック、パラリンピックに向けて日本のスポーツには益々関心が高まっています。トップアスリートばかりでなく、学童期、学生、さらに障害者などあらゆるカテゴリー、年代でスポーツは浸透し、まさにスポーツ文化を形成するに至っており、スポーツ整形外科医が担う役割は今後も増加していくことが予想されます。一方では、高齢者の変性疾患を基盤とするロコモティブシンドロームや子供の運動不足から生じるいわゆる子供ロコモ

も問題となっており、スポーツや運動療法の対応が求められています。このような多岐にわたる対象やスポーツ関連疾患に対して、それぞれの要求に応じた予防、治療を行っていくうえで、本学会の果たすべき役割は多大であると考えます。私は現在もプロサッカーのチームドクターとしてピッチを走り続けておりますが、医療側と現場側の認識の相違をしばしば経験します。選手にとって病院での治療は一つの過程であり、完全復帰のためにはコメディカルスタッフや指導者などとの連携のもと包括的なプログラムを作成しなければなりません。今後、日本整形外科学会とも連携を強化し、本学会がスポーツ関連傷害に対してイニシアチブをとって現場との連携を含めた体系的な治療体系を構築し、さらに、それに必要なスポーツ整形外科医を育成していくことが重要と考えております。甚だ微力ではございますが、本学会の発展のため鋭意努力する所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 監事ご挨拶

宗田 大

(独) 国立病院機構災害医療センター



この度平成 29 年度の役員改定にあたり、監事を務めることになりました宗田です。どうぞよろしくお願い申し上げます。私、32 年間に在籍した東京医科歯科大学では一貫して膝スポーツを専門として担当し、外科的にまた保存的治療を

駆使して、多くのスポーツ選手の現場復帰を手助けしてきました。

整形外科は近年専門化、細分化がどんどん進んでい

ます。専門化は診療の質を高めるためには大切ですが、多様な患者のニーズに応える方向性とはやや異なることがあります。整形外科の専門化が進む中、「スポーツ」は整形外科診療の横糸ともいえる共通の課題、高い目標となります。すべての整形外科医はスポーツ選手のニーズに応えることを臨床の目標としたいものです。伝統ある本日本整形外科スポーツ医学会が、より幅広く高いスポーツ医学を実践していくことは非常に意義深いと感じます。

松本理事長は整形外科スポーツ医学の教育や国際交流に高い理念を持ち、これを発展させる強い意思を持っています。これまで非常にしっかりした学会運営を担当してこられた先輩諸先生に習い、微力ながら理事長を支えさらに本会を盛り立てていきたいと存じます。

吉矢 晋一

兵庫医科大学



に参加し発表した当時のことが懐かしく思い出されます。学会の監事というのはキャリアを十分積まれた、上の先

生役職、というイメージがあったのですが、自分自身も役不足ながら、そのような年代になったものかと思っています。昨年の本学会の際に承認いただいて、監事を務めさせていただいています。私自身の学会への入会は 1980 年代ですので、30 年以上の会員歴になります。若いころに、未だ参加者数や規模の小さかった頃の本学会学術集

生に承認いただいて、監事を務めさせていただいています。私自身の学会への入会は 1980 年代ですので、30 年以上の会員歴になります。若いころに、未だ参加者数や規模の小さかった頃の本学会学術集

生に承認いただいて、監事を務めさせていただいています。私自身の学会への入会は 1980 年代ですので、30 年以上の会員歴になります。若いころに、未だ参加者数や規模の小さかった頃の本学会学術集

■ GOTS-KOSSM-JOSSM Traveling Fellowship 参加報告

藤巻 良昌 昭和大学

橋本 祐介 大阪市立大学

2017年5月26日から6月25日の期間、GOTSのAsiaフェローとしてヨーロッパでの研修をさせていただきましたのでご報告させていただきます。メンバーはJOSSMからは藤巻良昌(昭和大学)と橋本祐介(大阪市立大学)、KOSSMからはBiO Jeong (Kyung Hee medical center of Medical University) とKi-Sun Sung (Sungkyunkwan University School of Medicine)のあわせて4人でした。このフェローシップ制度はドイツ語圏(ドイツ、オーストリア、スイス)のスポーツ整形外科学会GOTSとアジア(日本、韓国)のスポーツ整形外科学会の交流としてGOTS/KOSSM/JOSSM Traveling Fellowshipとして1991年より開催されています。1991年にアジアから4名のフェローがヨーロッパを訪問して以来、一年おきにお互いのフェローを交換しています。

初日にフランクフルトの空港で私達を出迎えてくれたCasper先生は2010年のGOTSフェローメンバーとして日本と韓国を訪問した経験者で、2000-2006年のGOTS会長であるMartin Engelhardt先生とともに、実質的に今回のフェローシップの現地スケジュールをすべて調整してくれたナイスガイです。

訪問したのは4カ国、9つの都市、13施設で、ドイツの1)フランクフルト2)ミュンヘン3)レーゲンスブルグ、オーストリアの4)ザルツブルグ5)ウィーン、6)スイスのバーゼル、7)ドイツのハイデルベルグ、8)ルクセンブルグ、9)ドイツのベルリンです。それぞれの滞在先で病院や大学の施設見学、手術見学、講演会(聴講と発表)に参加しながら、最後はベルリンで開催されるGOTSの年次総会で発表を行うというものでした。余暇には訪問先のホストの先生(ほとんどが歴代フェロー経験者)が地元の観光やディナーに連れて行ってくださるなど、大変充実したものでした。

これもひとえにGOTSとJOSSMの長い友好の上に成り立っているのだと深く感じると同時に、このプログラムの歴史の1年に参加できたことに誇りを感じております。また、今後日本に訪れるヨーロッパからのフェローに対しては惜しみなく協力させていただきたいという気持ちでいっぱいでございます。

訪問先での手術見学では積極的に手洗いで参加させていただきました。特に見る機会が多かったのは培養軟骨移植の手術で、ヨーロッパでは今盛んに行われているそうです。離断性骨軟骨炎や外傷性軟骨損傷に限らず、軟骨欠損があれば適応しているようで、特に高位脛骨骨切りとの併用例が多くなされていました。手術室はどれも大変清潔でシステマティックに運用されていました。ほとんどの施設では麻酔をかける前室と手術室がつながっていて、一件が終わると次の患者が麻酔がかかってスタンバイしているという感じです。外来も同様にとてまうまく機能していて、大学病院でもスポーツクリニックのような専門性の高いところでも日本のように受診待ちの患者さんが並んでいるという光景は一切ありませんでした。保険システムと、患者/医師比率、病診連携の徹底などが日本との違いなのでしょう。印象的だったのはウィーンのKristen先生のクリニックでのお話です。オーストリアのプライベートクリニックでは受診料を保険の2倍までの範囲で自由に設定できるそうで、「値段を2倍にしたら、患者が半分になって楽になったけど、収入は変わらないからハッピーだよ。」とおっしゃっていたことです。

4週間というプログラムの期間はとても長く、毎日盛り沢山なスケジュールであることもあって最初の数日は最後まで気持ちと体力が続くのかと不安になりましたが、日が



写真：ベルリンにてGOTS総会でのプレゼンを終えて座長の先生方と。
左からDr. BiO, Dr. Hashimoto, Dr. Kristen (Wien), Dr. Egloff (Basel), Dr. Fujimaki, Dr. Ki-Sun

進むにつれその生活にも慣れ、日本人同士、また韓国のフェローとも強い絆が生まれました。私たちの公演での持ちネタは ACL の解剖学的形態（藤巻）、円板状半月板の治療戦略（橋本）、足関節外側靭帯損傷の治療（BiO）、陳旧性アキレス腱再建術（Ki-Sun）で、どこにいてもそれぞれ同じトークをするので、後半には「お互いのスライドを交換してもプレゼンできるね」なんて韓国の先生から冗談を言われるほど打ち解けることができました。現地での夕食会が特に予定されていない夜に

（といっても日程中たったの4日でしたが）4人で韓国料理を食べに行き共に焼酎を飲んだのは良い思い出です。

最後にフェローシップへの応募を快諾頂きました大阪市立大学整形外科の中村博亮教授、昭和大学整形外科の稲垣克記教授、フェローシップの機会を与えていただいた日本整形外科スポーツ医学会理事長の松本秀男先生、国際委員長の菅谷啓之先生はじめ関係の皆様にごこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

JOSSM Travelling Fellow-USA 報告記

荒木 大輔 神戸大学
長尾 雅史 順天堂大学
丸山 真博 山形大学

2017年7月8日から7月27日の約3週間、Traveling fellow-USAとして、Los AngelesにあるKerlan-Jobe Orthopaedic Clinic (KJOC)、PittsburghにあるUniversity of Pittsburgh Medical Center (UPMC)、New YorkにあるHospital for Special

Surgery (HSS)、およびSan FranciscoにあるUniversity of California, San Francisco (UCSF)の米国スポーツ整形外科界で代表的な4施設を訪問し、さらにTorontoで開催されました米国整形外科スポーツ医学会(AOSSM)に参加いたしましたので、ここに



写真 1 :

- (左上) White Memorial Hospital で Dr. Itamura と
- (右上) Dr. Fu による ACL 再建術レクチャー
- (左下) 北海道大学和田先生、東京医科歯科大学中川先生と共に New York 観光
- (右下) Dr. Ma 先生と San Francisco 観光



写真 2:

- (左上) AOSSM の開催された Metro Toronto Convention Center
- (右上) AOSSM 会場にて
- (左下) HSS Dr. Coldasco と
- (右下) UPMC Dr. Musahl と

報告申し上げます。

KJOC では、本院である KJOC と関連施設の White Memorial Medical Center を訪問し手術見学を致しました。日本ではなじみのない腱や軟骨の allograft や特殊な道具を用いての手術が多く大変勉強になりました。また、Cadaver トレーニングとして膝の各種靭帯再建に参加させていただく機会も頂戴しました。

UPMC では、スポーツ医学の世界的権威である Freddie H. Fu 先生の大歓迎を受け、手術見学・Cadaver を用いた ACL 手術の Concept をご教授くださいました。特に UPMC のスポーツ整形外科は 800 万ドルかけて Pittsburgh Steelers (NFL) と共に建設された UPMC Rooney Sports Complex、1200 万ドルかけて Pittsburgh Penguins (NFL) と共に建設された UPMC Lemieux Sports Complex があり、プロスポーツと地域が密着した素晴らしい施設を拝見することができました。また、現在神戸大学長井先生、木原先生、名古屋市立大学武長先生、兵庫医科大学井石先生、東京医科歯科大学中村先生がご留学中で、滞在期間中大変お世話になり感謝しております。

HSS では、松井秀喜選手の主治医でもあった Scott Rodeo 先生が迎えて下さいました。ここは New York Giants (NFL)・New York Mets (MLB)・New York Nets (NBA)・New York Jets (NHL) のメディカルサポートをされている上、US National Team の Official hospital としても高名な病院です。ここでも Sports medicine 専用の手術センターがあり、毎日 4 ～

5 名の Attending surgeon が多くの症例を手術するというスタイルでした。こちらでは現在北海道大学和田先生、東京医科歯科大学中川先生がご留学中で、滞在期間中大変お世話になり厚く御礼申し上げます。

AOSSM では review 中心の session が多く、我々は各個人のテーマにそって Presentation や、Discussion に参加しました。学会期間中、KJOC、UPMC、HSS それぞれの Scientific session & Alumni party が開催され、我々も招待していただき、お世話になった先生方と再会することができました。

UCSF ではホストの Benjamin Ma 先生のもと手術見学や新しいベイエリアのキャンパス見学もさせて頂きました。Academic Exchange Session が開催され、UCSF スタッフと我々が研究についての presentation を行い、活発な discussion を行いました。

ほぼ同年代の我々 3 名が Travelling fellowship で各施設を訪問させていただく機会を頂戴し、お互いの友情も深まる素晴らしい 3 週間となりました。この経験を少しでも日常診療や学会の発展に還元できるよう、引き続き精進させていただきます。

最後になりましたが、大変貴重な機会を与えていただきました松本秀男理事長、別府諸兄国際委員会アドバイザー、黒田良祐国際委員長、菅谷啓之国際委員会担当理事、熊井司国際委員会委員の先生方はじめ、JOSSM 会員の皆様に深く御礼申し上げます。また、陰ながらご支援下さいました日本整形外科学会スポーツ医学会事務局の斉藤しおり様に深謝申し上げます。

■ Allen Anderson 先生を偲んで

別府 諸兄

(公財) 日本股関節研究振興財団
聖マリアンナ医科大学



Allen F. Anderson 先生が昨年 11 月 12 日にご逝去されました。享年 68 歳でした。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

私は 2000 年 5 月 28 日～6 月 21 日に当時の米国スポーツ整形外科学会 (AOSSM) と西太平洋スポーツ整形外科学会 (WPOA) による、AOSSM/WPOA Sports Medicine Traveling Fellowship 2000 に God Father として、James J. Lam (Hong Kong), Yue Sie Wong (Singapore), Mohamed Razif (Malaysia) らと一緒に San Francisco, Houston, San Antonio, Birmingham, Lexington, Pittsburgh, Nashville, Sun Valley (学会開催地) の米国の著名なスポーツ整形外科の施設を訪問しました。

その中で 6 月 14 ～ 16 日に、Nashville (Vanderbilt 大学) を訪問しました。Host は Dr. Allen Anderson と Dr. Kurt Spindler でした (写真 1)。

これが Anderson 先生との最初の出会いです。先生は私と同じ 1949 年生まれで同い年であり、また 1989 年に Asian Travelling Fellowship AOSSM で来日されており、大変な親日家でありました。私は彼の温厚な人柄に大変感動しました。

この時の訪問が、その後の米国整形外科学会 (AOSSM) と日本整形外科学会 (JOSSM) 間で行われている連携に関係してまいります。彼は Fellowship の後 Host AOSSM Travelling Fellows を 1991 ～ 1994 年にお手伝いし、AOSSM Trav-

elling Fellowship Committee member として 1990 ～ 1995 年、また同委員会の Chairman を 1995 ～ 1998 年担当されました。

Anderson 先生は高校時代に football team のキャプテンであり、大学時代も選手として活躍されたと聞いております。テネシー州立大学を卒業して、Vanderbilt 大学整形外科でレジデントを終了し、その後、彼はスポーツ整形外科を専攻し、特に膝関節の専門家として、臨床、教育、研究を行ってきました。

彼は peer review journal に 101 の Scientific manuscripts, 26 の book chapters, 75 の instructional course lectures を行い、輝かしい業績を残し、AOSSM の 2015 ～ 2016 年の会長になり、ISAKOS の



写真 1



写真 2

Board of Directorsとしても活躍されました。彼の JOSSM に対する貢献は、2011 年 3 月に予定していました AOSSM と JOSSM Combined Meeting の開催に、大変協力をしていただいたことです。

ご存知のように、30 年近く前の 1991 年 1 月 22 日～25 日と 1993 年 3 月 20 日～25 日の 2 回、JOSSM と AOSSM の日米整形外科学スポーツ医学合同会議が開催されました。2001 年当時、私は JOSSM 国際委員会を担当しておりまして、常々何とかこの合同会議を復活し、再開できないかと考えました。そこで、どのようにしたらよいか相談しましたのが Allen Anderson 先生でした。彼を窓口にし、多くの AOSSM の先生と連携をとることができ、当時の高岸憲二理事長、現松本秀男理事長、筒井廣明先生、藤哲先生らと AOSSM と JOSSM の business meeting を毎年 7 月に開催し準備を行いました。その結果、2011 年に Combined meeting の開催まで漕ぎ付けることが可能となりました。第 3 回の JOSSM & AOSSM 合同会議は 2011 年 3 月 26 日～29 日、Hawaii Maui 島で日米合同手外科学会と同



写真 3

時開催とし、日本側が主催で開催を予定し、ホテル、参加者の予約もすべて用意が済み、準備万端でした。

しかし、残念ながら開催 2 週間前の 2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生しました。従いまして、念願の合同会議は中止になりました。これはまた、次の世代の先生方が引き継ぎ、継続してくれると思います。

最後に、Anderson 先生は 2016 年 9 月に AOSSM/AOSOM の Traveling Fellows の God father として再度来日されました。先生は AAOS の会長も終わり、米国を代表する整形外科学スポーツドクターとして、活躍しておりました。旧交を温め、二人で東京の下町を一緒に訪れました (写真 2)。

彼は大変やさしく、修学旅行の学生からも質問され、楽しく会話をしている姿を今でも思い出します。今でも、Nashville から「Moroe 元気か」と mail をくれるのではないかと考えています (写真 3)。

Allen の長年にわたるご協力、ご尽力に JOSSM 並びに、日本にいる彼の友人を代表して慎んで哀悼の意を申し上げます。

お知らせ

1. スポーツ損傷シリーズ

スポーツ損傷シリーズは、本学会監修の患者・関係者説明用パンフレットとして、現在、No. 31まで制作しています。学会ホームページにてPDFファイルの保存および印刷が可能ですので、是非、ご活用ください。なお、本シリーズ掲載の記事・写真・イラスト等を使用する場合は、必ず学会事務局に申請してください。

◆『スポーツ損傷シリーズ』URL ⇒ <http://www.jossm.or.jp/series/index.html>

2. American Journal of Sports Medicine (AJSM) の購読について

本学会員は、American Journal of Sports Medicine (AJSM) を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格	
AJSM 購読 (年間)	\$183.-	\$102.-	※年 12 冊発行
オンライン購読 (年間)	一般向けサービスなし	\$ 30.-	

上記いずれの購読方法でお申し込みいただいても、1972年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。特別優待価格での購読を希望される会員の方は、事務局あてにメールにて購読希望である旨をご連絡ください。(info@jossm.or.jp) 追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自で購入手続を進めてください。

編集後記

数十年ぶりという厳しい寒波が続いていますが、皆様お変わりございませんか。松本理事長の所信表明では、2020年にはJOSSM及びJOSKAS学術集会の合同開催を実施するとのことで、一度の学会で多くの新知見に触れることができ、学会出張日が減るので病院にとっても喜ばしいことと思います。別府先生からAAOSやAOSSMの会長をされたAnderson先生のご逝去の悲しいご報告がありました。Anderson先生は2011年のJOSSMとAOSSM合同会議の準備にご尽力いただいたとのことですが、東北震災により残念ながら中止になったことを思い出しました。すでにAOSSM、GOTSやKOSSMとの連携は良好とのことですので、今後、是非夏島のハワイで合同会議を開いていただきたいと思っています。日本からはJOSKASや日本臨床スポーツ医学会(JSCSM)との共同企画も楽しいのではないかと考えています。外国の先生方にスポーツ医学のオールジャパンを披露することは、世界の中での日本のプレゼンスを高める非常に良い機会と思いますが、皆様いかがでしょうか。第43回大会は、宮崎大学・帖佐教授が主催され、大いに盛り上がり成功裏に終了しました。今年9月には徳島大学・西良教授が主催されますが、成功させようとする「覚悟」がひしひしと伝わってきました。秋の徳島での学会を今から楽しみにしています。

(高橋敏明)

日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター No.17 2018年1月31日発行

編集：日本整形外科スポーツ医学会広報委員会

金岡 恒治 (担当理事)、平野 篤 (委員長)、
 亀山 泰 (アドバイザー)、酒井 宏哉 (アドバイザー)
 今田 光一、高橋 敏明、藤井 康成、安田 稔人

発行：一般社団法人日本整形外科スポーツ医学会

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 株式会社コングレ内
 TEL: 03-3263-5896 / FAX: 03-5216-3115
 E-mail: info@jossm.or.jp URL: http://jossm.or.jp/